

序

“また大圃流，やりませんか？”

羊土社の野々村さんからそんなお声掛けをいただいたのは、2017年の春先のことでした。港君と師弟での拙書“大圃流 ESDセミナー”（羊土社 野々村プロデュース 記念すべき第一号）の執筆の重圧から解放されて間もない頃です。「港～、ののむーが早々に次の企画を持ってきたよ（ー_ー）」「あんなに大変だったのに…、ののむーさん懲りてないんですかね」「ちっちゃいのに意外とタフなんだよね…」。

健康意識の向上に伴って、内視鏡診療はとて身近なものになってきました。皆さんの周りでも内視鏡検査をしたことがある人は珍しくないでしょう。そしてわれわれの提供すべき内視鏡検査・治療の内容は高度かつ複雑化し、より厳しく精度管理を求められるようになってきています。つまり、マンパワーは従来そのまま“以前よりたくさん”の患者さんに、より専門性の高い診療を提供することが要求されています。一方で特に看護師さんは多様な現場を経験することもキャリア上求められ、異動をくり返す場合も少なくありません。内視鏡室に異動後、引継ぎ期間もそぞろにひとり立ちせねばならないのが実情ではないでしょうか。特殊な職場、覚えることだらけの異空間に来てしまったと壁を感じている方も多いでしょう。

本書はそんな内視鏡診療に携わることになった看護師、技師の方を対象に、最初に手に取る一冊になれるように、より実践的な内容をふんだんに盛り込むことを目標に企画しました。教科書的な類書は多くありますが、個人的な感想を一言でいうと“量が多くて面白くない”んです。本書はそうならず現場でまさに指導者に教えてもらっていると思える内容にしました。手技的な部分では動画や図と写真を多用していますし、一気に読める取っつきやすさも大切と考え、ボリューム過多の詰め込み本とならないようにエッセンスだけをシンプルに書き出しています。

そして今回の執筆コンセプトは“ゴレンジャー”です。大圃組の誇る豪華執筆陣は、消化管領域は入隊2年目の機器マニアの志賀君に、胆膵領域は北の剛腕の弟子、佐藤君にお願いしました。彼らは私の軍団としてのチーム作業の経験が豊富で介助者としてのノウハウにあふれており、そのコツを惜しみなく披露してくれています。海外出向中ながら、港君が全体の方向性をまとめて管理してくれました。技術的な内容に偏らないために看護ケアという視点にも多くを割き、内視鏡センターの立ち上げや新人指導経験が豊富で今年度新入隊される青木さんに執筆をお願いしました。私は、ノルマをこなすような分担執筆ではなく1つの稿は1人で書ききってもらいたい、その方が絶対に流れのあるいい本になる、メッセージ性がある本になる、と考えています。故に各々の執筆者

の負担は大きくなりましたが、極力執筆者を少なくさせていただきました（ゴレンジャーにするために、5人にまとめる必要があったのですが）。その甲斐あって、介助技術と看護ケアの肝を抽出した、濃厚な“大圃流”として自信をもって皆さんにお勧めできる内容になりました。

そして、最後はやっぱり大圃組出版企画担当の野々村さん、前作からのデザイナーさんに頼んで素敵な表紙を作ってくださいました。これには執筆陣全員が“完璧”と即答です。こうして今回もお調子者のわれわれは、まんまと野々村さんの手の平で踊らされ、本書を書き上げることとなりました。この自画自賛の素敵なハンドブックが、皆さんが内視鏡診療の面白さに気づくのに一役買うことができれば幸いです。

2018年3月

NTT東日本関東病院 内視鏡部
大圃 研